

はだかの王さま^{おう}

ハンス・クリスチャン・アンデルセン



ナレーション A：むかしむかし、とある国のある城に王さまが住んでいました。王さまはぴっぴかの新しい服が大好きで、服を買うことばかりにお金を使っていました。王さまののぞむことといったら、いつもきれいな服を着て、みんなにいいなあと言われることでした。戦いなんてきらいだし、おしばいだって面白くありません。だって、服を着られればそれでいいんですから。新しい服だったらなおさらです。一時間ごとに服を着がえて、みんなに見せびらかすのでした。ふつう、めしつかいに王さまはどこにいますか、と聞くと、

めしつかい：「王さまは会議室にいらっしゃいます。」

と言うものですが、ここの王さまはちがいます。

めしつかい：「王さまは衣装部屋にいらっしゃいます。」と言うのです。

城のまわりには町が広がっていました。とても大きな町で、いつも活気に満ちていました。世界中のあちこちから知らない人が毎日、おおぜいやって来ます。

ある日、二人のさぎ師が町にやって来ました。二人は人々に、自分は布織り職人だとウソをつきました。それも世界でいちばんの布が作れると言いはり、人々に信じこませてしまいました。

さぎ師 A：「とてもきれいな色合いともようをしているのだけれど、この布はとくべつなのです。」

とさぎ師は言います。

さぎ師 B：「自分にふさわしくない仕事をしている人と、バカな人にはとうめいで見えない布なのです。」

その話を聞いた人々はたいそうおどろきました。たいへんなうわさになって、たちまちこのめずらしい布の話は王さまの耳にも入りました。

王さま：「そんな布があるのか。わくわくするわい。」

と、服が大好きな王さまは思いました。

王さま：「もしわしとその布でできた服を着れば、けらいの中からやく立たずの人間や、バカな人間が見つけれられるだろう。それで服が見えるかしこいものばかり集めれば、この国ももっとにぎやかになるにちがいない。さっそくこの布で服を作らせよう。」

王さまはお金をたくさん用意し、さぎ師にわたしました。このお金ですぐにでも服を作ってくれ、とたのみました。さぎ師はよろこんで引き受けました。部屋にはた織り機を二台ならべて、すぐに仕事にとりかかりました。でも、はた織り機には何もありませんでした。糸もありません。それでも、さぎ師はいっしょうけんめい布を織っていました。いいえ、ちがうのです。ほんとうは布なんてどこにもなくて、からののはた織り機で織るふりをしているだけなのです。ときどき、材料がなくなったみたいにいちばん値段の高い絹と金でできた糸をください、と王さまに言いました。のぞみどおり材料をもらうと、はた織りには使わず、またからのままで織るふりをしつづけました。夜おそくまではたらいで、がんばっているふりをしました。

しばらくすると王さまは、ほんとうに仕事がかどっているのか知りたくなってきました。自分が見に行ったらしかめてもいいのですが、もし布が見えなかったらどうしようと思いました。自分はバカだということになるのですから。でも王さまは王さまです。何よりも強いのですから、こんな布にこわがることはありません。でもやっぱり、自分が行く気にはなれませんでした。そこで、王さまは自分が行く前に、けらいをだれか一人行かせることにしました。けらいに布がどうなっているかを教えてもらおうというのです。このころには町の人みんな、王さまが作らせている布がめずらしい布だということを知っていました。だから、みんなは近所の人がどんなにバカなのかとても知りたくなっていました。

そこで王さまは、けらいの中でも正直者で通っている年よりの大臣を向かわせることにしました。この大臣はとても頭がよいので、布をきつと見ることができだろうと思ったからです。向かわせるのにこれほどぴったりの人はいません。

人のよい年よりの大臣は王さまに言われて、さぎ師の家へ向かいました。さぎ師がからののはた織り機で仕事をしている部屋に入りました。

大臣：「神さま、助けてください！」

といのりながら、両目を大きく見開きました。けれども、何も見えません。はた織り機には何もないのです。

大臣^{だいじん}：「ど、どうということじゃ!？」

と思わず口^{くち}に出^だしそうになりましたが、しませんでした。そのとき、

さぎ師^しA：「大臣^{だいじん}さん、」

とさぎ師^しが声^{こえ}をかけました。

さぎ師^しA：「どうです？ もっと近^{ちか}づいてよく見^みてください。このもよう、いろいろな技術^{ぎじゆつ}が使^{つか}われていてすごいですし、この色合^{いろあ}いだって美^{うつく}しくて、思^{おも}わずうなってしまういそうでしょう？」

さぎ師^しはそう言^いって、からのた織^おり機^きをゆびさしました。大臣^{だいじん}はなんとかして布^{ぬの}を見^みようと思^{おも}いましたが、どうやっても見^みえません。だって、そこにはほんとうに何^{なに}もないんですから。

大臣^{だいじん}：「大変^{たいへん}なことじゃ。」

と大臣^{だいじん}は思^{おも}いました。自分^{じぶん}はバカなのだろうか、と首^{くび}をかしげました。でもそう思^{おも}いたくありませんでした。大臣^{だいじん}はまわりを見^みまわしました。二人^{ふたり}のさぎ師^しがいるだけです。よいことに、まだ自分^{じぶん}が布^{ぬの}が見^みえない、ということを誰^{だれ}も気^きがついていません。『見^みえない』、と言^いわなければ誰^{だれ}も気^きづかないのですから。

さぎ師^しB：「あのう、どうして何^{なに}もおっしゃらないんですか？」

と、さぎ師^しの片^{かた}われがたずねました。もう一人^{ひとり}のさぎ師^しはからのた織^おり機^きでいっしょうけんめい働^{はたら}くふりをしています。

急^{きゅう}に言^いわれて、大臣^{だいじん}はあわてました。

大臣^{だいじん}：「あ……ふうん。とてもきれいで、たいそう美^{うつく}しいもんじゃなあ。」

大臣^{だいじん}はメガネを動^{うご}かして、何^{なに}もないた織^おり機^きをじっくり見^みました。

大臣^{だいじん}：「なんとみごとな柄^{がら}じゃ。それにこの色^{いろ}のあざやかなこと！ このことを王^{おう}さまに言^いえば、王^{おう}さまもきっとお気^きにめすじゃろうなあ。」

さぎ師^しA & さぎ師^しB：「その言^{ことば}を聞^きけて、ありがたきしあわせです。」

二人^{ふたり}のさぎ師^しが口^{くち}をそろえて言^いいました。

さぎ師^しB：「では、王^{おう}さまにもっと知^しっていただくために、布^{ぬの}についてこまかく説明^{せつめい}いたしましう。」

さぎ師^しはからの^おはた織り機^きの前^{まえ}でしゃべりはじめました。色^{いろ}がこいとかうすいとか、もようがうねうねしてるとか、まっすぐとか。ことこまやかに言う^いのです。大臣^{だいじん}はその説明^{せつめい}を一言^{ひとこと}ももらさず聞き入^きっていました。なぜなら、大臣^{だいじん}は王さま^{おう}にもう一度同じことをまちがえずに言^いわなければならぬからです。もしここで一言^{ひとこと}でもまちがえようものなら、あとで王さま^{おう}がほんものを見たときに大臣^{だいじん}には布^ぬが『見えなかった』と気づ^きいてしまいます。だから大臣^{だいじん}は聞^きいたことをそのまま王さま^{おう}に言^いいました。

大臣^{だいじん}が帰るとき、さぎ師^したちはもっと金^{きん}の糸^{いと}や絹^{きぬ}がほしいと言^いいました。布^ぬを織^おるためにひつようだと言^いうので、すぐに持^もってこさせました。でもやはり、さぎ師^したちは金^{きん}の糸^{いと}や絹^{きぬ}を一本^{いっぽん}も使^{つか}わないでみんな自分^{じぶん}の物^{もの}にしてしまいました。そして何^{なに}もないからの^おはた織り機^きでずっと織^おるふりをつづけました。

それからまもなく、王さま^{おう}はもう一人^{ひとり}さぎ師^しの^むところに向^むかわせました。これも根^ねのまっすぐな役人^{やくにん}でした。役人^{やくにん}の仕事^{しごと}は、布^ぬのはかどりぐあいと完成^{かんせい}する日^ひにちをしらべてくることでした。しかし、役人^{やくにん}も大臣^{だいじん}と同じように、見^みえたのはからっぽのはた織り機^きだけでした。なんどもなんども見^みましたが、どうしてもからっぽにしか見^みえませんでした。

さぎ師^しA：「どうなされたのですか？ もしかして、お氣^きにめさないとか……」

ふたり^{ふたり}のさぎ師^しは不安^{ふあん}そうにたずねました。そして何^{なに}もないはずの布^ぬをまるであるかのように見^みせびらかせました。

さぎ師^しB：「ほら、この王さま^{おう}のえらさにぴったりのこのもよう、……どうでしょうか？」

さぎ師^しは言^いいますが、布^ぬはどこにもありません。

役人^{やくにん}は思^{おも}いました。

役人^{やくにん}：「わたしはバカではない。自分^{じぶん}にふさわしくない仕事^{しごと}をしているだけだ。そうだ、バカではない。おそらく……この布^ぬはとてもふうがわりなのだろう。しかし、このことを、だれにも知^しられてはならないのだ……」

役人^{やくにん}は少し考^{かんが}えてから、言^いいました。見^みえない布^ぬをあたかも見^みえているように。

役人^{やくにん}：「たいへんみごとな布^ぬだ！ 色^{いろ}合いも美^{うつく}しいし……柄^{がら}ももうしぶんない。わたしはこんな布^ぬを見^みられてとてもうれしいよ！」

そうして城^{しろ}に帰^{かえ}った役人^{やくにん}は王さま^{おう}に向^むかってこ言^いいました。

役人：「たいへんけっこうなものでした。」

ナレーション B 街はそのめずらしい布のうわさでもちきりでした。うわさがどんどんもり上がっていくうちに、王さまも自分で見てみたくなってきました。日に日にその思いは強くなるのですが、いっこうに布は完成しませんでした。王さまはいてもたってもいられなくなって、たくさんやくにんの役人をつれて、二人のずるがしこいさぎ師の仕事場に向かいました。つれていった役人の中には、まえぬのに布を見に行つた二人もふくまれていました。

さぎ師の仕事場につくと、二人はいっしょうけんめいに働いているふりをしていました。糸を一本も使わないで、まじめに仕事をしているふりをしていました。

役人：「さあどうです、王さまにぴったりな、たいそうりっぱな布でしょう？」

前に来たことのある二人の役人がみんなに向かつて言いました。

役人：「王さま、王さまならこの布の色合い、柄をお気にめしますでしょう？」

そして、二人はからのはた織り機をゆびさしました。二人は他のみんなには布が見えると思っていたからです。

でも……

王さま：「なんだこれは？ 何もないじゃないか。」

と、王さまは思いました。

王さまは自分がバカかもしれないと思うと、だんだんこわくなってきました。また、王さまにふさわしくないかと考えると、おそろしくもなってきました。王さまのいちばんおそれていたことでした。王さまが王さまでなくなるなんて、たえられなかったのです。

だから、王さまはさぎ師たちを見て言いました。

王さま：「まさしくそうであるな。この布がすばらしいのは、わたしもみとめるところであるぞ。」王さまはまんぞくそうにうなずいて、からっぽのはた織り機に目を向けました。何も見えないということを知られたくなかったので、からっぽでも、布があるかのように王さまは見つめました。同じように、王さまがつれてきた役人たちも見つめました。王さまが見ているよりももっと見ようとしました。でもやっぱり、何も見えてはいませんでした。

役人：「これは美しい、美しい。」

役人たちは口々に言いました。

誰か A：「王さま、この布で作ったりっぱな服を、ちかぢか行われる行進パレードのときにおめしになってはどうでしょう。」

と、誰かが王さまに言いました。そのあと、みんなが「これは王さまにふさわしい美しさだ！」とほめるものですから、王さまも役人たちもうれしくなって、大さんせいでした。そして王さまは、二人のさぎ師を『王国とくべつはた織り士』と呼ばせることにしました。

パレードの行われる前日の晩のこと、さぎ師たちは働いているように見せかけようと、十六本ものロウソクをともしていました。人々は家の外からそのようすを見て、王さまの新しい服を仕上げるのにいそがしいんだ、と思わずにはいられませんでした。さぎ師はまず布をはた織り機からはずすふりをしました。そしてハサミで切るまねをして、糸のない針はりでぬい、服を完成させました。

さぎ師A：「たった今、王さまの新しい服ができあがったぞ！」

王さまと大臣全員が大広間に集まりました。さぎ師はあたかも手の中に服があるように、両手を挙げてひとつひとつ見せびらかせました。

さぎ師B：「まずズボンです！」

さぎ師A：「そして上着に！」

さぎ師B：「最後にマントです！」

さぎ師は言葉をまくしたてました。

さぎ師A：「これらの服はクモの巣と同じくらいかるくできあがっております。何も身につけていないように感じる方もおられるでしょうが、それがこの服がとくべつで、かちがあるといういわれなのです。」

大臣：「まさしくその通りだ！」

大臣はみんな声をそろえました。でもみんな何も見えませんでした。もともとそこには何もありませんから。

さぎ師B：「どうか王さま、ただいまおめしになっている服をおぬぎになって下さいませんか？」

さぎ師は言いました。

さぎ師^しB:「よろしければ、大きなかがみの前^{まへ}で王^{おう}さまのお着^きがえをお手伝^{てつだ}いしたいのです。」

王^{おう}さまはさっそく服^{ふく}をぬぎました。二人^{ふたり}のさぎ師^しはあれやこれやと新^{あた}しい服^{ふく}を着^きつけるふりをしました。着^きつけおわると、王^{おう}さまはあちこちからかがみにうつる自分^{じぶん}を見^みました。

大臣^{だいじん}:「何^{なん}と美^{うつく}しい！ ……よくおにあいです！」

その場^ばにいただれもがそう言^いいました。

役人^{やくにん}:「この世^よのものとは思^{おも}えなく美^{うつく}しい柄^{がら}、言^いいあらわしようのない色合^{いろあ}い、すばらしい、りっぱな服^{ふく}だ！」と、みんなほめたたえるのでした。

そのとき、パレードの進^{しん}行^{こう}役^{やく}がや^きって来^きて、王^{おう}さまに言^いいました。

パレード進^{しん}行^{こう}役^{やく}:「行^{こう}進^{しん}パレードに使^{つか}うてんがい（王^{おう}さませんようの大きな日^ひがさ）が準^{じゅん}備^びできました。かつぐ者^{もの}たちも外^{そと}でいまやいまやと待^{まち}っております。」

王^{おう}さま:「うむ、わたしもしたくは終^おわったぞ。」

と、王^{おう}さまは進^{しん}行^{こう}役^{やく}に答^{こた}えました。

王^{おう}さま:「どうだ、この服^{ふく}はわたしににあってるかね？」

王^{おう}さまはかがみの前^{まへ}でくるっと回^{まわ}ってみせました。なぜなら王^{おう}さまは自分^{じぶん}の服^{ふく}に見^みとれてい^いるふりをしなければならなかったのですから。

お付^つきのめしつかいはありもしない服^{ふく}のすそを持^もたなければなりませんでした。地面^{じめん}に両手^{りょうて}をのばして、何^{なに}かをかかえているようなふりをしました。やはりめしつかいも何^{なに}も見^みえていないことを知^しられたくなかったので、すそを持^もち上^あげているようなまねをしているのでした。

王^{おう}さまはきらびやかなてんがいの下^{もと}、どうどうと行^{こう}進^{しん}していました。人々^{ひとびと}は通^{とお}りやまどから王^{おう}さまを見^みていて、みんなこんなふうにさけんでいました。

村人^{むらびと}:「ひゃあ、新^{あた}しい王^{おう}さまの服^{ふく}はなんてめずらしいんでしょう！ それにあの長^{なが}いすそと言^いったら！ 本^{ほん}当^{とう}によくおにあいだこと！」

だれも自分^{じぶん}が見^みえないと言^いうことを気^きづかれないうにしていました。自分^{じぶん}は今^{いま}の仕^し事^{ごと}にふさわしくないだとか、バカだとかいうことを知^しられたくなかったのです。ですから、今^{いま}までこれほどひょうばんのいい服^{ふく}はありませんでした。

子供：「でも、王さま、はだかだよ。」

とつぜん、小さな子どもが王さまに向かって言いました。

子供：「王さま、はだかだよ。」

父親：「……なんてこった！ ちょっと聞いておくれ、むじゃきな子どもの言うことなんだ。」

横にいたそのこの父親が、子どもの言うことを聞いてさげびました。そして人づたいに子どもの言った言葉がどんどん、ひそひそとつたわっていきました。

人々：「王さまははだかぞ！」

ついに一人残らず、こうさけぶようになってしまいました。王さまは大弱りでした。王さまだってみんなの言うことが正しいと思ったからです。でも、

王さま：「いまさら行進パレードをやめるわけにはいかない。」

と思ったので、そのまま、今まで以上にもったいぶって歩きました。めしつかいはしかたなく、ありもしないすそを持ちつつけて王さまのあとを歩いていきましたとさ。

翻訳の底本：English Translation by H.B.Paull (1837) "The Emperor's New Suit"

上記の翻訳底本は、著作権が失効しています。

1999（平成 11）年 12 月 24 日初訳

※この翻訳は「クリエイティブ・コモンズ 表示 2.1 日本 ライセンス」

（<http://creativecommons.org/licenses/by/2.1/jp/>）によって公開されています。

翻訳者：大久保ゆう

2014 年 3 月 24 日作成

青空文庫収録ファイル：

このファイルは、著作権者自らの意思により、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）に収録されています。

* 訳者に確認の上、一部表記を改めています。